

あすたむらんどリニューアル基本構想（案）

2026年6月

徳島県

I 現状と課題

1 現状

- ・あすたむらんど徳島は、「水と緑と光」をコンセプトに整備された、科学と自然に触れ合うことができる大型公園である。
- ・遊びや体験を通して科学する心を育てる参加体験型の「子ども科学館」のほか、プラネタリウムや体験工房など、ファミリー層を中心として楽しみながら学べる、多彩な企画・イベントを展開している。
- ・令和3年には木のおもちゃ美術館がオープンし、令和5年（開園22年目）には入園者数が1,000万人に到達。年平均入園者数は43万人前後で推移しており、校外学習の場・県民の憩いの場として多くの方に利用されている。

◇概要

開 園	平成13年7月1日
所 在 地	徳島県板野郡板野町那東字キビガ谷 45-22
敷地面積	約 243,565 m ² (24ha)
主な施設	子ども科学館、プラネタリウム、吉野川めぐり（ウォーターライド）、芝生広場、風車の丘、くつろぎ館（飲食）
併設施設	木のおもちゃ美術館（令和3年オープン）

◇園内マップ



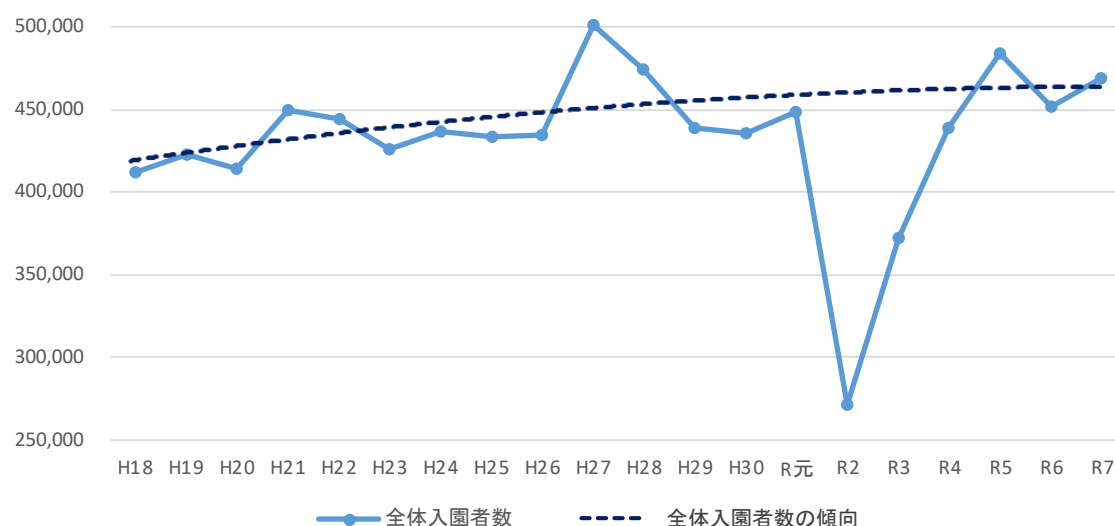
2 課題

(1) 有料施設の更なる魅力向上

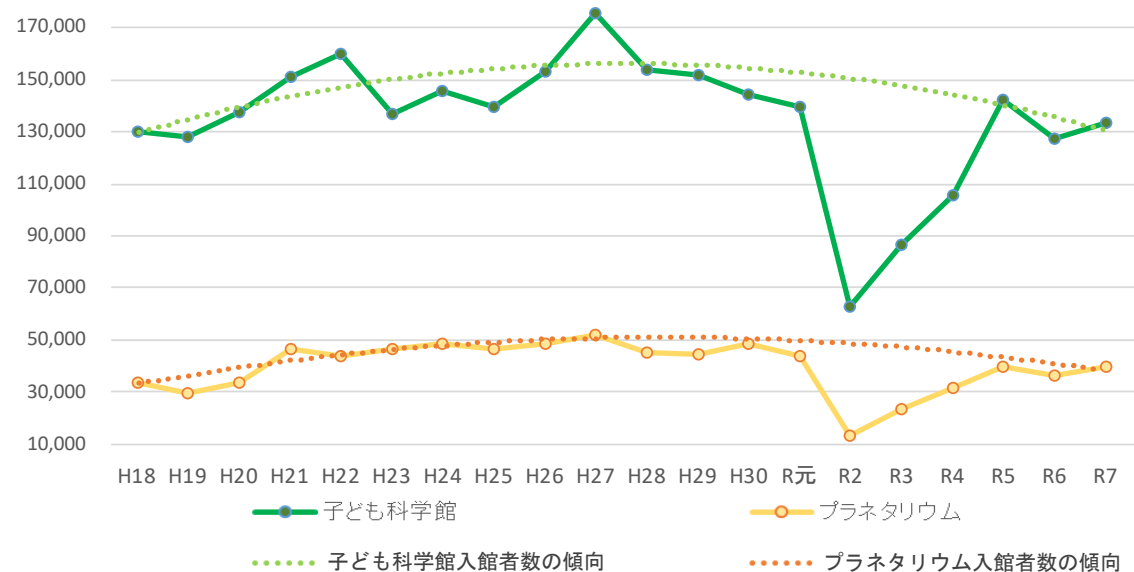
全体入園者数はコロナ禍を除き、約43万人前後で推移している一方、子ども科学館・プラネタリウムの入館者数は、コロナ禍を経て回復の動きは見られるものの、全体の傾向としては近年減少傾向を示している。この要因の一つとして、開園以来、大規模更新がなく、老朽化、展示の陳腐化が進んでいることが考えられる。全ての子どもたちに科学への興味・発見・学びの機会を提供するため、時代に合わせた展示更新が必要である。

また、常に内容をアップデートし続けられるよう、持続的な運営体制の構築も今後の課題である。

◇全体入園者数の推移



◇子ども科学館・プラネタリウム入館者数の推移



※各傾向線について、R2～4のデータはコロナ禍による特殊要因として除外

◇子ども科学館の展示の一部



経年劣化による不具合が発生



使用されているパソコンのOSが古く、修繕ができない状況

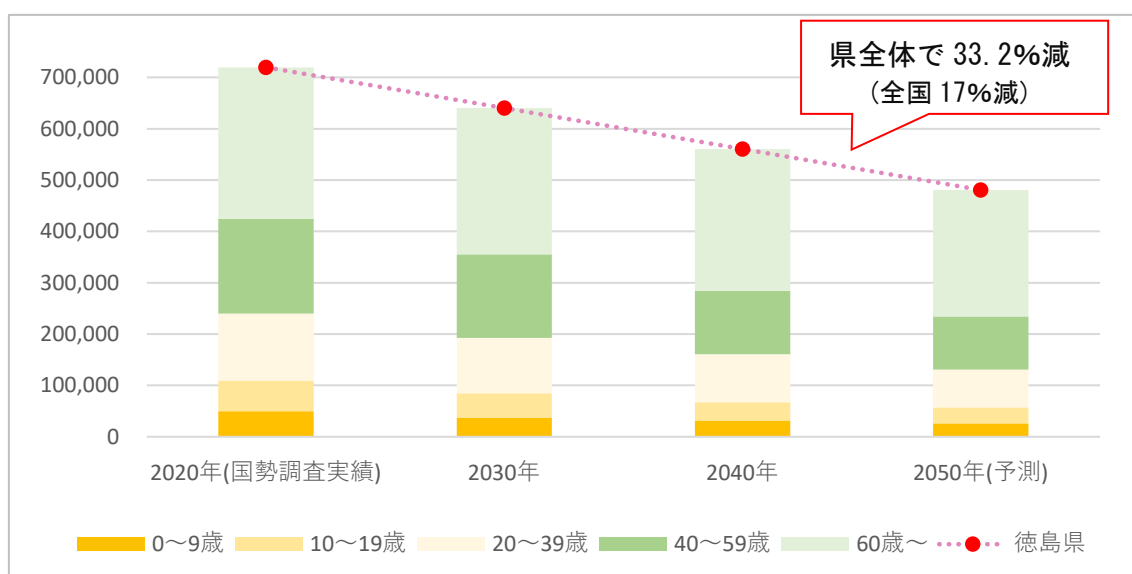


(2) 新たな利用者層の獲得

人口減少や少子化により、現在のメイン利用者層（0～9歳）は、2050年には約47%減（2020年比）となる予測。利用者アンケートでも「こどもが大きくなってからは行かなくなった」との意見が挙がっており、施設を最大限に活用するため、今後はファミリー層に加え、若者や観光客など、新たな利用者層の掘り起こしが必要である。

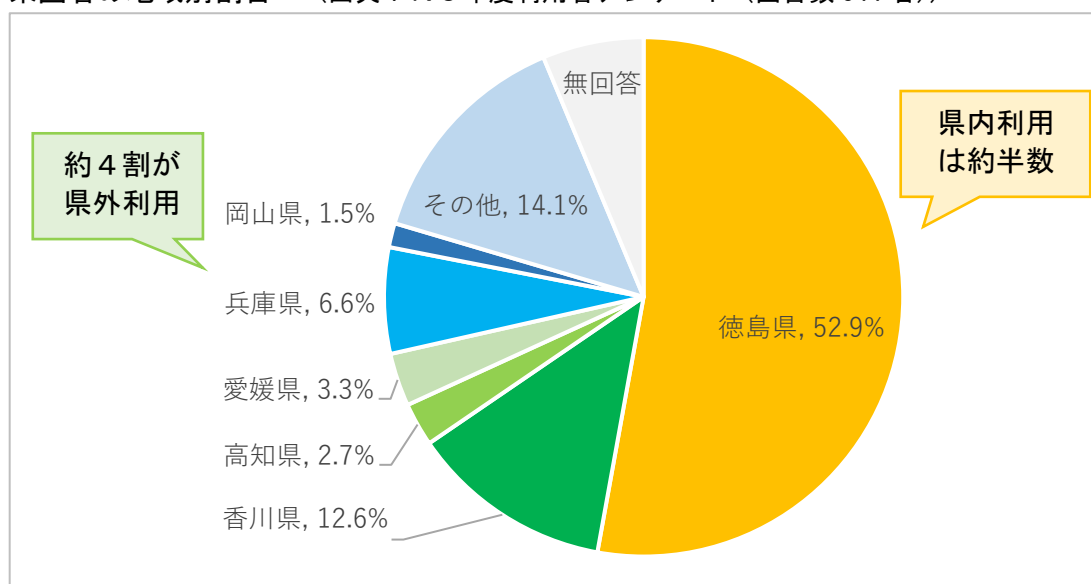
◇徳島県の将来人口推計

（出典：厚生労働省 国立社会保障・人口問題研究所『日本の地域別将来推計人口（2023年推計）』）



徳島県	2020 年(国勢調査)	2050 年(予測)	増減率
0～9 歳	49,927 人	26,198 人	▲47.6%
10～19 歳	59,204 人	30,906 人	▲47.3%
20～39 歳	130,757 人	73,867 人	▲43.6%
40～59 歳	184,607 人	103,471 人	▲44.0%
60 歳以上	295,064 人	246,227 人	▲16.6%

◇来園者の地域別割合 （出典：R6年度利用者アンケート（回答数344名））



（3）持続可能な運営体制の検討

現在の施設維持管理・運営経費は県費で賄っており、その負担費用は年間約6億円に上る。人口減少・少子高齢化等により、県財政が一層厳しさを増す中、持続可能な施設運営を実現するため、財政負担の縮減を図っていく必要がある。

また、社会情勢の変化に伴い、多様化する利用者ニーズに対応した効果的・効率的なサービス提供も求められており、民間ノウハウの積極的な導入を検討する必要がある。

Ⅱ 基本構想策定の経緯

あすたむらんどは、子ども科学館とふれあい公園を核に、「科学に関する体験」と「人と人との交流の場」として、平成13年の開設以来、こどもやファミリー層を中心に、累計1,000万人を超える多くの方々に利用いただいている。

一方で、先述のとおり、施設の老朽化や展示内容の陳腐化が進み、さらには、人口減少や少子化、レジャーの多様化など、社会情勢が大きく変化する中で、あすたむらんどが、これからも魅力のある施設であり続け、さらに価値の高い選ばれる施設となるためには、社会・技術の進展や、県民の皆様の幅広いニーズを踏まえた抜本的な見直しを行う必要がある。

また、見直しにおいては、サービスや利便性向上、運営の効率化を実現する民間活力の導入を積極的に検討する必要がある。

本構想は、県民の皆様や有識者、民間事業者等、様々な観点から頂いたご意見・ご提案を踏まえながら、リニューアルに向けた基本的な考え方をとりまとめたものである。

今後、基本構想に定める方針のもと、専門知識やノウハウを有する民間事業者や有識者等との連携により、目指す将来像の具現化を進めていくこととする。

策定経緯

◆あすたむらんどのあり方見直しに関する県民アンケート

令和7年12月1日～令和8年1月4日実施 回答者2,770名

◆官民連携事業化に向けたサウンディング調査

令和7年10月30日～令和8年1月13日実施 8事業者・団体

◆あすたむらんどあり方検討会（委員10名、庁内PT7名）

令和7年11月28日 第1回検討会

- ・現地見学
- ・意見交換

令和8年2月16日 第2回検討会

- ・県民アンケート及びサウンディング調査結果について
- ・基本構想素案について
- ・意見交換

◆「あすたむらんどリニューアル基本構想(素案)」に係るパブリックコメント

令和8年3月3日～令和8年4月8日 意見数26名・27件

Ⅲ 目指すべき施設の将来像

- ▶ 徳島にしかないテーマパーク
- ▶ 年間60万人のにぎわい創出
- ▶ 持続可能な「収益循環」の創出

1 基本方針

エンターテインメントを通じた「学び」の拠点

- (1) エンターテインメントと学び(教育)を融合させた「エデュテインメント (Edutainment)」の拠点として、こどもから大人まで、あらゆる世代が遊びや体験を通じて、楽しみや夢、目標を見出すことができる施設
- (2) 本県の「豊かな自然」や「産業・技術」、「伝統文化」を体感できる拠点として、「徳島の未来を担う人材育成」や「地域活性化」に寄与する施設
- (3) 現代ニーズの核心である「ウェルビーイング」や「サステナビリティ」をキーワードとした、徳島ならではの「価値ある体験」を創出し、国内外からの誘客が図れる施設

2 見直しの観点

(1) 社会情勢の変化を踏まえた「施設価値」の再構築

- ・ これまでのメイン利用者である「ファミリー層」の満足度向上を図るとともに、若者から大人、観光客など、ターゲット層の拡大を見据えた「施設コンセプト」の見直し
- ・ 時代の変化や技術の進展を取り入れ、デジタル技術による施設のアップデートを行うことで、よりエンターテインメント性の高い施設へと進化

(2) 持続・成長する施設運営の実現

- ・ 10年、20年先も、多くの人を集客できる魅力的な施設であり続けるため、民間活力(資金とノウハウ)の積極的な導入により、「施設の魅力向上」と「運営の効率化」を両立できる運営体制を実現
- ・ 県や運営事業者だけでなく、県内外の企業や各種団体、さらには教育機関等が施設運営に関わり、相乗効果を生み出す連携体制を構築

Ⅳ 今後の方向性

1 重視する機能

今回の見直しに至った経緯や県民の皆様・有識者のご意見などを踏まえ、次の点を重視しながら、リニューアルに向けた具体的な検討を進める。

(1) 次世代を育む「科学・技術」の探求拠点

- ・最新の科学技術を駆使した没入型・体感型展示やデジタルアートなど、こどもから大人まで楽しみながら学べる「エンターテインメント性の高い施設」として展示内容をリニューアル
- ・教育機能を重視し、「発見」「創造」「発表」をサイクルとした探求学習やSTEAM教育の拠点として、各種体験型プログラムを展開
- ・県関連企業や大学、クリエイター等との連携による職業体験イベントの開催や先端技術の紹介などを通じ、地域の産業発展や人材育成に寄与
- ・プラネタリウムは、様々な映像コンテンツの提供やコンサートなど、多目的利用が可能な施設へのリニューアルを検討

(2) 多世代が楽しめる「遊びと憩い」の環境

- ・老朽化した遊具のリニューアル、県民アンケートで要望があった未就学児向け遊具や誰もが一緒に楽しめるインクルーシブ遊具等の導入
- ・雨天時や夏季でも利用しやすいよう、屋根付きベンチ等の休憩場所の充実
- ・滞在中の利便性・快適性を高めるため、飲食・物販利用満足度の更なる向上
- ・幅広い世代の健康増進の場として、ウォーキングやランニングコースの設定
- ・四季折々の自然を楽しめるエリアの設定
- ・吉野川めぐりは大規模修繕も含め、観客が乗ったり移動したりするアトラクションの継承を検討

(3) 若者・大人・観光客をターゲットとした新たなにぎわい創出

- ・音楽フェスや野外映画祭、キャンプなどのイベントやアトラクションなど、若者のニーズを踏まえたコンテンツの充実
- ・夜間のイベントや飲食提供など、これまで利用が少なかった時間帯を活用した新たなにぎわいの創出
- ・安全安心に夜間利用を楽しめるよう、照明設備や安全柵等の環境整備
- ・ゼロウェイストや資源循環の視点を施設運営に取り入れるなど、「サステナブル」「ネイチャーポジティブ」の体験・実践を促進

2 持続可能な運営に向けた検討課題

(1) 「安定的な収入確保」と「施設維持・投資への収益の還元」

- ・将来の維持管理コストを踏まえた施設の最適化
- ・施設の収益性を高め、得られた収益を施設維持や新たな投資に還元し、利便性や魅力向上に繋げるサイクルを検討
- ・入園料、駐車場の有料化や、施設利用料については、各施設の目的や役割、提供サービスの内容を踏まえ、適切な料金見直しを検討
- ・アンケート結果では、利用料金は「無料または低い料金に設定してほしい」という声も多数あるため、料金徴収のあり方については更なる検討が必要

(2) 誰もが快適に過ごすための「ゾーニング」

- ・こどもやファミリー層をはじめ、多様な利用者層が混在することから、こどもの安全を確保しつつ、誰もが快適に過ごすことができるよう、時間・空間の両面から適切な区分け（ゾーニング）の検討が必要

(3) 若年層の来園を促す「アクセスの向上」

- ・現状、主な交通手段は自家用車に偏っていることから、自家用車を所有しない層の来園を促すため、二次交通の充実など、アクセス向上に向けた検討が必要

V 事業手法の考え方

当該事業は、全体的な施設コンセプトのもと、様々な機能を有する複合施設の改修設計・施工に加え、整備後の維持管理・運営まで多岐にわたり、各分野において、専門的な知識やノウハウが求められる。特に、施設運営においては、利用者ニーズや社会情勢の変化に対応した柔軟な施設運営を可能とする体制整備が求められる。

また、施設の機能とソフト事業は密接に関連し、運営を見据えた効果的・効率的な改修を実現するためには、施設改修の設計段階から事業運営に至るまで、専門的知見や豊富な事業経験を有する民間事業者のノウハウを活用できることが重要である。

さらに、早期の整備着手を目指すとともに、全面休園させることなく、運営を継続しながら、計画的に施設リニューアルを進めるため、最適な事業手法の検討を進めていく。